終助詞「な」の意味用法について

森山 新[1)]

目　次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 終助詞「な」とはなにか
4.「な」の使用実態とその用法
　4.1. 聞き手めあて性
　4.2. 文体との関係
　4.3. 話し手と聞き手の内部世界のあり方
　4.4. 話し手優先の立場
　4.5.「な」が用いられる背景
5. 男性語と女性語に関して
6. おわりに

1) 世宗大學校

1. はじめに

最近、モダリティに対する関心が高まる中、終助詞に関する研究がさかんに行われている。その中でも特に終助詞「ね」と「よ」は比較・対照されつつ様々な分析がなされてきた。一般的に終助詞と言ってだれもが思い浮かべるのはやはり「ね」と「よ」であろう。ところがごく親しい間柄においては、「ね」や「よ」に劣らず、「な」が多く用いられていることはあまり知られていない。

終助詞「な」は、意味・用法が広範囲にわたっている。ところが終助詞「な」は、伝達態度のモダリティとしては、「ね」や「よ」ほどに研究が行われていない。また往々にして終助詞「ね」と同類扱いされてしまうことが多く、その違いについてはあまり目が向けられていない。

本稿の目的は、「ね」との比較研究を通して、特に伝達態度のモダリティとしての終助詞「な」の意味用法について明らかにすることにある。

2. 先行研究

伝達態度のモダリティ[2)]としての終助詞「ね」と「よ」については益岡(1991)など様々な先行研究がある。

益岡(1991)は「終助詞『ね』と『よ』の機能」において、終助詞「ね」と「よ」の本質的な機能を明らかにすることにより、その働きに統一的な説明を加え、さらに「ね」と「よ」を同じカテゴリー内で相対立する項として扱っている。

それによれば、「ね」と「よ」は話し手と聞き手の内部世界のあり方の一致性、対立性を表す形式であるという。「ね」と「よ」という形式が内在的意味として表すのは、自分が有する知識や意向のあり方が、聞き手が持っていると想定される知識や意向のあり方と「一致する方向」にあるのか、それとも「対立する方向」にあるのかという点に関する話し手の判断であり、「ね」はその判断が「一致型」であり、「よ」は「対立型」であるというのである。

2) 益岡(1991)では、終助詞「ね」や「よ」を伝達態度のモダリティとしているが、仁田(1989)では発話・伝達のモダリティと呼んでいる。

一方「な」と「ね」に関していえば、筆者の知る限り先行研究はあまり多くはないが、注目されるのが佐治(1991)の研究である。

佐治(1991)によれば、<ね・な>は<よ・や・え・い><さ>と共に第1類の終助詞とされている。これらは間投助詞としても用いられるもので、この類の終助詞が表す話し手の態度は、「文の最初からでも表し得るものであって、聞き手に対する直接的な態度である」(p.19)という。また<ね・な>は尋ねかける気持ちで使われ、話し手の聞き手に対する「問いかけ、同意を求める気持ち」または「尋ねかけ、念を押す気持ち（ことによって、相手に同意、共感をうながす気持ち）」を表す。また「よ」の類は「ね」の類と気持ちの上では逆で、話し手の聞き手に対する「押しつける」ような気持ちを表すという。そしてこれら第1類の終助詞の機能をまとめて、「聞き手めあての働きかけ、もちかけ」としている。ところが、佐治(1991)は「ね」と「な」についての言及はない。

また神尾(1990)では、情報が聞き手・話し手の双方のなわ張り内にある場合の文形は<直接ね形>、聞き手のなわ張り内にあるが、話し手のなわ張りの外にある場合には<間接ね形>をとるとして、終助詞「ね」に特別な役割が付与されている。そこでは終助詞「ね」についての様々な研究がなされているが、ここにおいても終助詞「な」は「ね」の変異形とだけ述べられているに過ぎない。

3. 終助詞「な」とはなにか

終助詞「な」には以下のようにいくつかの意味・用法がある。例えば見坊豪紀他編『新明解国語辞典第三版』（三省堂）によれば、

な（終助）

①相手に何かを禁止することを表わす。

「そこを動くー・二度とするー・そんなにあわてるーよ」

②気安くつきあえる相手に対する命令を表わす。〔ぞんざいな表現〕

「あっちへ行きー・あぶないからやめー」

③自分の主張・判断などを相手に納得させたり自分で確認したりなどする気持ちを表わす。

「私はそうはおもわないー・たぶん違うだろうー・一緒に行こうー・ちょうだいー・君もやってくれる（だろう）ー・まちがいないー・遅れないで来いよー・急げばまにあうー・もうこれでおしまいだー」

④何かの実現を心から望む気持ちを表わす。（中略）

「早く来ないかー・待ってくれるかー・晴れるといい（が）ー」

⑤直接的な感動を表わす。

「うれしいー・ほんとにきれいだー・よく来たー」

⑥自分の言葉を相手に納得させようとする気持ちを表わす。

「これはー、大切にするんだよ・お前はーあわてん坊だからー」

〔⑥は男性が使う。③～⑥は「なあ」ともなる〕

①～⑤が終助詞的用法、⑥が間投助詞適用法である。本稿では終助詞としての「な」の意味・用法を扱うため、以下⑥のような間投助詞的な用法は省くことにする。また「伝達態度のモダリティ」としての「な」を主に扱う関係上、①の禁止の「な」や②の命令・要求の終助詞「な」も除外する。

これを見ると、終助詞「な」には、話し手が聞き手めあてに用いられる場合（聞き手めあての用法）と、聞き手をめあてにするのではなく、独り言のように話し手が一人で発話する際に用いられる場合（聞き手不めあての用法）とがあることがわかる。

従って上の区分をそうした観点から再区分してみれば、以下のようになる。

（1）聞き手めあての場合

③’自分の主張・判断などを相手に納得させる。

「君もやってくれる（だろう）ー・まちがいないー・遅れないで来いよー」

⑤直接的な感動を表わす。

「よく来たー」

（2）聞き手不めあての場合

③"自分の主張・判断などを自分で確認する気持ちを表わす。

「急げばまにあうー」

④何かの実現を心から望む気持ちを表わす。

「早く来ないかー・待ってくれるかー・晴れるといい（が）ー」

⑤直接的な感動を表わす。

「うれしいー・ほんとにきれいだー」

さらに、（1）と（2）の中間型ともいうべきものがある。これは「聞き手の知識や意向には触れず、表現の面では（2）のようにあたかも独り言をいうかのようであるが、話し手の心中は聞き手をめあてとしている」用法である。たとえば以下のような場合がこれに相当する。

01)さとみ「見られちゃったんですね、私。はずかしいな。」（若者）

02)さとみ「医大には行っている人に、そんなこと言われたくないな。」（若者）

これらはドラマの中で、独り言を言うように語られてはいるが、実際には目の前に聞き手が存在し、間接的に相手に自分の気持ちを伝達しているものである。ここではこれを、「（3）中間型」としておく。

4．「な」の使用実態とその用法

＜表1＞はフジテレビ系ドラマ『若者のすべて』（1994年）の第1回から第5回までに用いられた、主な終助詞・間投助詞の使用回数を示している。ここで終助詞とは間投助詞を含まない狭義の意味の終助詞である。なおデータ集計にあたっては、より

実際の会話に近づけるため、台本のシナリオを用いるのではなく、テレビ放映されたドラマを聞き取って改めてシナリオを作成し、データを集計した。このドラマは京浜地区（川崎）に生まれ育った男性４人（うち１人は植物人間となっており、台詞はほとんどない）、女性２人の６人の仲間（２１～２２歳）の友情・恋愛を描いた青春ドラマであり、親しい若者たちの会話がドラマの大半を占める。研究資料としてこのドラマを用いた理由も、このように主人公たちがみな同じく東京圏で生まれ育ち、同年代であり、ごく親しい仲間であるというドラマの場面設定が研究目的に合致していたためである。

これをみればわかるように、「な」「ね」「よ」の使用回数は終助詞的用法がそれぞれ１３４、９６、３００回（間投助詞的用法まで含めると１９０、１４１、３０６回）となっている。つまり親しい間柄では、終助詞「な」が「よ」に次いで頻繁に用いられていることがわかる。

4.1. 聞き手めあて性

終助詞「な」の用法をさらに細かく見てみると、次のようになる。

（1）聞き手めあての用法

男が７９、女が３例で大半は男性に用いられている。

佐治(1991)によれば、「な」には「ね」と同様、話し手が聞き手に対して「尋ねかけ、念を押したり（確認）、同意、共感をうながす（同意）」用法がある。ところが上述したように

＜表１＞終助詞・間投助詞の使用回数

	終助詞		間投助詞		合計	男女比
	男	女	男	女		
な	１０７	２７	５５	2	１９０	男>>女
な（1）	７９	3	５１	1	１３４	男>>女

な（中間）	19	17	3	1	40	男≧女
な（2）	7	7	2		16	男≧女
な（禁止）	22				22	男
な（命令）					0	
ね	34	62	14	31	141	女＞男
よ	208	92	4	2	306	男＞女
さ	2		81	23	106	男＞女
ぞ	18				18	男
ぜ	11				11	男
わ	4	12			16	女>>男
て・で（依頼）	6	14			20	女＞男
ってば		2			2	（女）
っけ	2				2	（男）
もん・もの	1	13			14	女>>男
そ	1				1	（男）
んだ	106	21			127	男>>女
のか	22	1			23	男>>女
の	25	76			101	女＞男
の（肯定）	3	32			35	女>>男
の（疑問）	22	44			66	女>>男
んです	14	25			39	女＞男
んです（肯定）	14	23			37	女＞男
んです（疑問）		2			2	（女）
んですか	5	13			28	女＞男
合計	586	360	154	58	1，159	

註1)ここでは、男性語と女性語の特徴や傾向を明らかにするという研究の便宜上「んです」など、一般に終助詞・間投助詞と言えないものも含まれている反面、「か」など、明らかに終助詞・間投助詞であるにもかかわらず、表にないものもある。また「て」「で」はここでは若干女性語的性格を帯びた依頼の用法のもののみを集計した。

註2)「な」のうち（1）（中間）（2）は上述の区分。

「な」は「③' 自分の主張・判断などを相手に納得させる気持ちを表す」とあるように、単なる確認や同意ではなく、「相手に納得させて確認や同意を求める」ものである。つまり「ね」は話し手が聞き手と同格の立場に立って確認や同意を求めているのに対し、「な」の場合は話し手が聞き手に対し自分を優位な立場に立たせた上で、聞き手に「納得させている」点が異なっている。こうした確認・同意の求め方の相違が、「な」をして男性に好まれる原因となり、また「ね」をして女性に好まれる原因となっているものと思われる。以下の例文を比較すれば、03)が聞き手より優位の立場、04)が聞き手と同格の立場に話し手を置いていることは明らかであろう。

03)よく来たな。

04)よく来たね。

このように男性話者は聞き手めあての用法において確認、同意、感動を表すとき、「ね」の代わりによく「な」を用いていると言えるだろう。そして「な」と「ね」の違いは「な」が話し手が聞き手に対し、自らを優位の立場に立たせることであると言えそうである。

(2) 聞き手不めあての用法

男が7、女が7例と男女ともに用いられている。この用法は自分一人で自問自答したり、感動したりする場合である。

05)堀「だめだな、参ったな、どっかに修理工場ないかな。」(若者)

06)亮子「私もいつか大きな役、もらえるかな。そうしたらもっと楽しいだろうな。」(若者)

上の例のうち、05)は男性、06)は女性の例である。いずれも聞き手に尋ねているというより、一人で考え込んだり、空想にふけっている場合である。このように聞き手をめあてとして聞き手に何かを伝達したり何かを尋ねたりするというより、聞き手がめあてでなく、自分一人で考えたり、それを表現したりする場合には、「な」が男女共に用いられる。

（3）中間型の用法

男が１９、女が１７例とこれもやはり男女ともに用いられている。

07)堀「そのうち案内してほしいな。ご両親のお宅にも伺いたいし。」（若者）
08)薫「なんて言うのかな、あんまり家、裕福とは言えないし。」（若者）
09)亮子「ずるいな、守は。人生さぼっちゃってさ。ずるいよ。」（若者）
10)薫「でもびっくりするだろうな、うちの両親。」（若者）

07)が男性、08)～10)が女性の例であるが、これらの用法は「ね」や「よ」のように聞き手の知識や意向に直接触れることはせず、とりあえず自分の知識や意向を表明してみようといった場合である。言い方をかえれば、表現上は（2）の聞き手不めあての用法を用いつつも、心中では聞き手をめあてとし、聞き手の知識や意向を窺い知ろうとしているのである。こうした用法は男女ともに用いることができるようである。

このように見てくると、（1）の聞き手めあての用法ではもっぱら男性の用法となっているが、（2）の聞き手不めあての用法や（3）のような中間型の用法では、男女ともに用いることができるようである。話し手の内面ではなく、表現の面で考えると（1）は聞き手をめあてとし、（2）（3）は聞き手をめあてとしていない。従って聞き手をめあてとした「な」は男性の用法であるのに対し、表現上聞き手をめあてとしない（2）（3）は男女ともの用法であるといえる。

4.2. 文体との関係

次に文体との結びつきを調べてみよう。<表２>は「な」「ね」「よ」が丁寧体・普通体に接続する回数を示している。

これをみればわかるように、「な」は丁寧体には接続しにくい。もちろん、

11)雅史の父「当分、こちらにもどる予定はありませんな。」（妹よ）

12)初恵の父「うちの初恵とは大違いですな。」（妹よ）

のように「な」が丁寧体と全く接続されないことはない。11)12)はドラマ「妹よ」において、高木コーポレーションの会長とその息子（雅史）と神崎産業の社長とその娘（初恵）とが、お見合いをする場面に交わされた対話分である。このように、年輩男性は丁寧体に「な」を付けることが若干見られる。しかし、一般的には<表２>が示すように「な」は丁寧体にはつきにくいと言えるだろう。

<表２>終助詞「な」「ね」「よ」の文体別使用回数

	終助詞		間投助詞		合計	男女比
	丁寧体	普通体	丁寧体	普通体		
な	0	１３６	0	５４	１９０	男>>女
ね	１４	８２	3	４２	１４１	女>男
よ	１９	２８１	0	6	３０６	男>女
合計	３３	４９９	3	１０２	６３７	

4.3. 話し手と聞き手の内部世界のあり方

次に終助詞「な」を、「ね」や「よ」と同じように、話し手と聞き手の内部世界のあり方との関連において考えてみたい。

益岡(1991)によれば、「自分（話し手）が有する知識や意向のあり方」が、「聞き

手が持っていると想定される知識や意向のあり方」と「一致する方向にある」と話し手が判断したのが「ね」、「対立する方向にある」と話し手が判断したのが「よ」であった。

（1）聞き手めあての「な」は、「ね」と同じく「自分（話し手）が有する知識や意向のあり方」が、「聞き手が持っていると想定される知識や意向のあり方」と「一致する方向にある」と話し手が判断した場合もあるが、「な」は話し手が聞き手に「納得させる」とあるように、「話し手が聞き手に対し、知識や意向のあり方を一致せしめようとする」場合が少なからずあると思われる。例えば、

13)明日、君も来るな。

は、単純に「ね」と同じく相手に対して確認する場合もあろうが、「まさか来ないわけじゃないだろうな。来なかったら承知しないからな。」という意味が含まれる場合がある。つまり聞き手の知識や意向が一致するだろうといった「一致（するだろう）型」ではなく、聞き手の知識や意向を話し手のものと一致せしめようという「一致（させよう）型」である。これを「一致強要型」としておこう。

（2）聞き手不めあての場合は、話し手自身の知識や意識のみを考えており、「聞き手が持っていると想定される知識や意向のあり方」に対しては無関係・無関心または不干渉といった場合である。これを「自己完結一致型」とする。

（3）中間型の場合は、話し手は「聞き手の知識や意向が一致することを望みながらも、とりあえず聞き手の知識や意向は不問とし、独り言のように自分の知識や意向を言ってみよう。または言ってみて聞き手がどのような反応を示すか見てみよう」といった場合である。つまり外面的には「聞き手不めあて」であるが、内面的には「聞き手めあて」であり、「一致（すればいいけど）型」である。これを「一致願望型」としておく。

これら3つの立場は、話し手と聞き手との内部世界のあり方という点において、全く異なっているように見える。しかし終助詞「ね」と比較してみると、「ね」は

聞き手を話し手と同格に置くのみならず、最終判断を聞き手に委ねているのに対して、「な」は最終判断を聞き手に委ねるといった思いはなく、あくまで話し手が中心であり、話し手の知識や意向が優先されている点が大きく異なっている。つまり「ね」と「な」との最大の違いは、聞き手に対する尊重度、聞き手への気配りの多少にあると言えそうである。[3)]

4.4. 話し手優先の立場

次にどのような時に「な」が用いられるかを考えてみたい。

まず（1）聞き手めあての場合について考えてみよう。

＜表３＞は「聞き手めあての場合」に「な」が用いられた場合の話し手と聞き手の内訳である。これを見ると「な」が用いられるのは、

(ｱ)話し手が男性で、聞き手がごく親しい関係（同年または年下）である場合

(ｲ)話し手が男性で、聞き手に対して、かなりの優位な立場に立っている場合

(ｳ)話し手が女性で、聞き手に対して、話し手が自身を敢えて優位な立場に立たせたい場合

の３つの場合である。＜表３＞でいえば、(ｱ)は01～15、(ｲ)は16～27、(ｳ)は28～31である。これらはいずれも、聞き手に対し特別な気配りを示す必要がなく、ぞんざいに扱うことができる場合であると言えよう。

ここでいかなる時に「な」が用いられるかを、さらに深く考えてみよう。

(ｱ)の場合は男性の場合であるが、男性にとっては、気配りがなくぞんざいに相手を扱うのは、ある意味で親しみの表現となっている。女性の場合は、ぞんざいよりは尊敬や思いやりなどが親しみの表現となる場合が多い。例えば日本において夫婦は、夫は妻を「おまえ」とぞんざいに呼ぶ一方で、妻は夫を「あなた」と呼ぶこと

---

3)但し、「ね」のように聞き手の知識や意向に直接触れることが失礼になる場合に、「な」を用いて聞き手の知識や意向に対しては触れずにおこうといった内的な姿勢は、逆に聞き手への気配りとも解釈できるが、外的な表現としては聞き手への配慮を欠いた(2)聞き手不めあての用法を用いていることから、ここではとりあえず外的な表現を中心に見ておくことにする。

が多い。このような違いが女性には「な」よりは「ね」、男性には「ね」よりは「な」が用いられる背景となっているのではないだろうか。従って男性が、(イ)のように単に自分が優位な立場に立っている場合のみならず、(ア)のようにごく親しい間柄にも相手をぞんざいに扱い見下すような「な」を用いるのであろう。

また儒教的伝統の残っている日本では、男性は自分を女性の上に置こうとする、言い換えれば女性を下に見る傾向性が歴史的に存在し、今もなお言語習慣の中に残っている。それが男性語となって定着し、その結果、男性の話し手が女性の聞き手に確認や同意を求める場合にも、より対等関係に両者を置こうとする「ね」よりも自分を優位に置こうとする「な」が好んで用いられるのではないだろうか。

＜表３＞聞き手めあての「な」の話し手と聞き手との関係

No	話し手	聞き手	両者関係	性別	終助詞	間投助詞	合計
０１	哲生	圭介	同年親友	男→男	２１	１１	３２
０２	哲生	守	同年親友	男→男	1	1	2
０３	哲生	武志	同年親友	男→男	1		1
0.4	武志	守	同年親友	男→男	7	1	8
０５	武志	哲生	同年親友	男→男	2		2
０６	圭介	哲生	同年親友	男→男	2	1	3
０７	圭介	武志	同年親友	男→男	1		1
０８	哲生	妙子	兄妹	男→女	5	7	１２
０９	哲生	薫	同年親友	男→女	5	4	9
１０	哲生	亮子	同年親友	男→女	3	3	6
１１	圭介	亮子	同年親友	男→女	2	1	3
１２	堀勇一	薫	恋人関係	男→女	4		4
１３	慎介	亮子	恋人関係	男→女	3	2	5
１４	圭介	妙子	年齢上下	男→女	2		2
１５	哲生	友人たち	同年親友	男→多	2	3	5

１６	堀勇一	哲生	客と店員	男→男	2		2
１７	哲生	市職員	客と職員	男→男	1		1
１８	圭介父	圭介	父子	男→男	1	2	3
１９	亮子父	哲生	年齢上下	男→男		2	2
２０	市川	哲生	年齢上下	男→男	1		1
２１	先輩	圭介	先輩後輩	男→男	3		3
２２	刑事	武志	年齢上下	男→男	3	5	8
２３	先輩	武志	上司部下	男→男		2	2
２４	反町	武志	年齢上下	男→男		2	2
２５	上司	薫	上司部下	男→女	1		
２６	上司	田辺	上司部下	男→女	1		
２７	武志	千鶴子	片思い	男→女	5	3	8
２８	亮子	哲生	同年親友	女→男		1	1
２９	薫	哲生	同年親友	女→男	2		2
３０	亮子	薫	同年親友	女→男	1		1
３１	薫	千鶴子	年齢上下	女→男	1		1
合計					８３	５１	１３４

さらに日本においては、武家文化の影響などから、男性らしさとは歴史的に強者のイメージを持ち合わせていた。日本の男性の名前に「武」「士」「雄」「勇」などが好んで用いられ、男の子の節句には、武将をかたどった五月人形が飾られる。こうしたことから言語習慣においても、男性は自分を強く飾り、自らを優位に置こうとする意味あいから「な」が用いられ、それが男性語となって表れるものと思われる。

このように(ｱ)(ｲ)のように男性が「ね」の代わりに用いる「な」は、「聞き手を下に見る」自己優位的な立場の表れであり、これがある時には親しみの表現ともなっているのである。

次に＜表３＞で、女性の話し手が聞き手めあてに「な」を用いている(ｳ)の場合を

考察してみよう。

14)亮子「水臭いな。どうして私には教えてくれないの。」（若者）

15)薫「哲生、元気出せよな。哲生が元気じゃないと、なんか嫌だよ。」（若者）

16)薫「あなたにとやかく言われたくないな。」（若者）

14)は仲間への非難の気持ちの表明、15)は仲間への激励、16)はあまり親しくない相手と口論になった際の相手に対する反発である。激励は相手を元気づけ、引き上げようという気持ちであり、激励する者はされる者に対し、当然上の立場に立って相手を引き上げてあげなければならない。非難や反発は対立的な立場であり、これも聞き手に対し少しでも話し手自身を優位に立たせなければならない。

このように女性が聞き手めあてに「な」を使うのは、「話し手自身を敢えて優位に立たせなければならない」場合である。それで話し手優位の立場の表れである「な」を女性が用いているのである。

さらに「な」が丁寧語にはあまり用いられないのも、丁寧語とは元来、相手に対する顧慮の表明であり、こうした立場は話し手優位で聞き手に対する気配りに欠けた「な」の立場とは相矛盾することは明らかである。そして年輩男性の場合には丁寧語と共に「な」が用いられる場合があるが、これは自尊心の表明とでも言えよう。つまり聞き手に対する顧慮を丁寧語で用いておく一方、話し手自身の優位性は維持して、それを「な」で表現するのである。

次に（2）の聞き手不めあての用法は、話し手優位からさらに聞き手無視、いいかえれば聞き手に対し無関心、無関係、不干渉な場合に用いられている。「ね」が聞き手を尊重し、聞き手（の知識や意向）に対し積極的に関わろうとしているのとは対照的な用法である。

さらに（3）の中間型は、聞き手の知識や意向に関しては関心がありながらも、何らかの理由で、表現上聞き手めあではないような形をとり、とりあえずは話し手の知識や意向を表明してみよう、といった場合である。これには、

(ア)話し手の直接的な感動や気持ちを表す場合

(イ)聞き手の知識や意向に触れることが躊躇される場合

とがあるものと思われる。(ア)は聞き手の知識や意向よりもまずは話し手自身の感動や気持ちを表明したいといった場合である。01)09)10)などがこれに当たる。(イ) は聞き手との関係が疎遠だったり、聞き手が異なった知識や意向を持っていて両者の間に知識の相違や意向の対立が起こることを憂慮して、とりあえずは話し手自身の知識や意向を表明してみて、聞き手の反応を見てみようといった場合などがあろう。例えば02)は圭介とさとみとが未だ疎遠な関係のために「な」が用いられている。また登場人物の中で圭介は、内気で消極的なタイプなため、相手の心の中に気軽に踏み込んでいくことができず、「ね」や聞き手めあての「な」を用いる代わりに、こうした中間型の「な」を頻繁に用いる傾向があるが、こうしたことも中間型の「な」が聞き手との関係が疎遠な場合に用いられるといういい例であろう。別の登場人物である哲生（元不良学生ということもあり、少し乱暴なタイプ）が、絶えず聞き手めあての「な」をよく用いるのとは対照的である。また07)は事実上のプロポーズであるため、とりあえず話し手の意向を表明してみて、聞き手の反応を見ようとしている。

このように終助詞「な」には様々な意味・用法があるが、これらをひとまとめに「話し手優先で、聞き手に対する気配りが少ない」立場として、統一的に扱うことができそうである。

最後に次の２つの文を比べてみよう。

20)そんなこと、するなよな。

21) * そんなこと、するなよね。

20)には2つの「な」、禁止の「な」と（1）の聞き手めあての「な」が含まれているが、聞き手の意向や立場よりも、話し手の意向を優先し、押しつけるという点において、2つの「な」は相矛盾なく用いられている。ところが、21)において、後ろ側の「な」がいくら「ね」と似た聞き手めあて用法だとはいえ、21)の「ね」は聞き手を同格の立場に立て、聞き手に気を配り、最終判断を聞き手に委ねる立場であるため、21)の文は非文となる。「禁止」や「命令・要求」には、聞き手への気配りに欠ける「な」は使えても、聞き手への気配りが多い「ね」は不適切なのである。

4.5. 「な」が用いられる背景

最後に最近「な」が頻繁に用いられている背景について、ここでは2つの要因を提起してみたい。

第一には、さきに述べた最近の個人主義的傾向である。多くの兄弟を持ち、大家族の中で生まれ育った昔と違い、現代は核家族が進むとともに、家族当たりの子供の数の平均も2人を下回り、個々人の個人主義的傾向や独善的傾向が増しているのが現状であろう。こうした中、言語表現においても、積極的に聞き手との知識や意向との関係を表明するのではなく、話し手優先または話し手中心の表現が増加することは十分に予想されうることである。その結果「よ」や「ね」よりも、「な」がよく用いられるようになったのではないだろうか。

第二には、地方語（方言）の影響である。大阪や京都などでは、「ね」の代わりに「な」を用いる傾向がある。

たとえば『近世上方語辞典』[4]によれば、京都・大阪では「な」には次のような用法がある。

---

4)前田勇編，「近世上方語辞典　第六版」（東京：東京堂出版，1984），P.824.

親しい間柄に用いる終助詞。天保・大阪江戸風流ことば合わせ「大阪にて、なといふを、江戸にて、ねといふ」（文政四年・烏歌話に「京でアノな」江戸で「アノね」京・江戸相通で「アノの」とある）

また『京ことば辞典』5)にも似たような記述がある。

ナー《助》間投助詞「ね」に同じ。「あんナー、きょうナー、日の暮れにナー、夜店が出るんヤテ」。「おまえのナー、机の上ナー、ちょっと片付けとかなアカンデ」。

このように関西では、「ね」の代わりに「な」が用いられる傾向がある。関西弁の標準語への影響は、若い世代を中心として少なからず存在するものと思われる。特にテレビのコメディ番組などは、関西弁がそのまま用いられることが多く、こうしたことが若い世代の、しかも親しい間柄での言葉に大きく影響を及ぼしていると思われるのである。その結果「な」が「ね」の代わりに多用されるようになったと考えられるのである。但しこれは筆者の所見であり、これに対する具体的検証が必要であろう。

5. 男性語と女性語に関して

冒頭でも述べたように、日本語は他の言語に比べ、対人的機能に敏感な言語である。そのため話し手はたえず聞き手との関係に配慮し、言語活動を営まなければならない。日本語に男性語・女性語の別が生まれ、発達したのも、こうした対人的機能の敏感さによるところが大きいのかも知れない。

例えば、男性は「ね」の代わりに「な」を用い、気配りに欠けるといったぞんざいさをもって親しみの表現とする一方、女性は「ね」を用い、知識や意向の一致をもって親しみの表現とするなど、対人関係のあり方に従って男性語・女性語の区別

5)井之口有一・堀井令以知共編，「京ことば辞典」（東京：東京堂出版，1992），P.185.

も生まれてきた。

一般的にいえば、男性は女性に比べ、ぞんざい、断定的、押しつけ的、自分を優位に立たせる、態度を明確にするといった面があり、女性はそれとは対照的に、やさしく丁寧、断定や押しつけを避ける、相手を尊重し気を配る、態度を明確にしないといった面がある。従って男性

＜表４＞男性・女性が多く用いる終助詞・間投助詞

	終助詞		間投助詞		合計	男女比
	男	女	男	女		
な（禁止）	２２				２２	男
ぞ	１８				１８	男
ぜ	１１				１１	男
な	１０９	２７	５３	２	１９１	男>>女
んだ	１０６	２１			１２７	男>>女
のか	２２	１			２３	男>>女
さ	２		８１	２３	１０６	男>女
よ	２０８	９２	４	２	３０６	男>女
んです（肯定）	１４	２３			３７	女>男
んですか	５	１３			１７	女>男
ね	３４	６２	１４	３１	１４１	女>男
て・で（依頼）	６	１４			２０	女>男
の（疑問）	２２	４４			６６	女>男
わ	４	１２			１６	女>男
の（肯定）	３	３２			３５	女>男
もん・もの	１	１３			１４	女>>男

註）＜表１＞のうち、用例が少ないものについては割愛した。

語・女性語にもそうした側面があるといえるだろう。

＜表４＞は＜表１＞を男性が多く用いるもの（上段）、女性が多く用いるもの

（下段）に分けて配列したものである。これによれば男性が多く用いるものには、禁止の「な」、「ぞ」、「ぜ」、「な」、「んだ」、「のか」、「さ」、「よ」などであり、女性が多く用いるものには、「もん・もの」、肯定の「の」、依頼の「（ない）で」、依頼の「て」、「ね」、「んですか」、肯定の「んです」などである。

これをみれば、男性語はぞんざい、断定的、押しつけ的、自己を優位に立てる、態度を明確にするといった面があり、女性語はそれとは対照的に、やさしく丁寧、断定や押しつけを避ける、相手を尊重する、態度を明確にしないといった面があることがわかるであろう。気配りという点でいえば、全般的に男性語は気配りに欠け、女性語は気配りが多いと言えるだろう。

ところが最近、男女の中性化現象が、社会的にも見られ、それに伴い男性語・女性語といった言語的な面においても、中性化傾向が見られる。例えば男性が「わ」を、女性が「さ」や「な」を使うことが増えている。こうしたことは、男性語・女性語といった性別的側面が退化し、その一方で男性語や女性語が本来その根本に持ち合わせている機能的側面が重視されてきたとも言えるだろう。

例えば、14)～17)でみたように、女性が聞き手を激励したり非難し、見下したりするときには、「な」を用いて語気を強める、男性が意思表明をする際に、語気を和らげるために「わ」を用いるといったふうにである。つまり性差によって言葉を使い分けるのではなく、語気の強弱や気配りの多少によって言葉を使い分けるといった面が次第に増えてきていると言えるのではないだろうか。

今後日本語がどのように変化していくかは定かでないが、社会の時代的趨勢から見る限り、男性語・女性語といった性別的側面はさらに退化し、反面気配りの多少や語気の強弱といった機能的な側面が重視される傾向はますます進むであろうと思われる。

6. おわりに

以上、終助詞「な」について見てきた。

終助詞「ね」との比較の中で整理してみれば、次のようになるであろう。

・「ね」；聞き手めあて的で、気配りも多い

・「な」；(1)では聞き手めあて的だが、話し手を優位に立て、聞き手への気配りに欠けている

(2)では聞き手不めあて的で、話し手中心、聞き手への気配りはない

(3)では内面的には聞き手めあてであり、聞き手への気配りが存在するが、外面的には聞き手不めあてであり、表現上聞き手への気配りが少ない

つまり「な」は共通して、聞き手と聞き手の持つ知識や意向のあり方に対して、話し手を優先とし、聞き手への「気配りに欠けた」表現形式であると言えそうである。

そしてそれぞれの形式が内在的意味として表すのは、聞き手が持っていると想定される知識や意向のあり方に関して、「ね」が「一致型」の判断、「よ」が「対立型」の判断であるとすれば、「な」は（1）「一致強要型（一致させよう型）」の場合、（2）「自己完結一致型（無関心・不干渉型）」の場合、（3）「一致願望型（一致すればいいけど型）」の場合とがあるといえるだろう。

＜例文出典＞

若者＝フジテレビ系ドラマ「若者のすべて」

妹よ＝フジテレビ系ドラマ「妹よ」

参 考 文 献

井之口有一・堀井令以知共編．「京ことば辞典」．東京：東京堂出版，1992年．

神尾昭雄．「情報のなわ張り理論」．東京：大修館書店，1990年．

佐治圭三．「日本語の文法の研究」．東京：ひつじ書房，1991年．

尚学図書編．「日本方言大辞典」．東京：小学館，1989年．

牧村史陽編．「大阪方言辞典」．大阪：杉本書店，1955年．

益岡隆志．「モダリティの文法」．東京：くろしお出版，1991年．

見坊豪紀他編．「新明解国語辞典　第三版」．東京：三省堂，1988年．

前田勇編．「近世上方語辞典　第六版」．東京：東京堂出版，1984年．